此方十劫邪義章（一帖第十三通）

そもそも、ちかごろはこの方念仏者のなかにおいて、不思議の名言をつかいて・これこそ信心をえたるすがたよといいて、しかもわれは当流の信心を・よく知り顔の体に心中にこころえおきたり、そのことばにいわく・十劫正覚のはじめより・われらが往生を定めたまえる、弥陀の御恩をわすれぬが・信心ぞといえり、これ、おおきなるあやまりなり、そも弥陀如来の正覚をなりたまえるいわれを・しりたりというとも、われらが往生すべき・他力の信心といういわれをしらずは・いたずらごとなり、しかれば向後においては・まず当流の真実信心ということを・よくよく存知すべきなり、その信心というは・大経には三信と説き、観経には三心といい・

阿弥陀経には一心とあらわせり、三経ともにその名かわりたりといえども・そのこころは・ただ他力の一心をあらわせるこころなり、されば、信心といえるそのすがたは・いかようなることぞといえば、まず、もろもろの雑行をさしおきて・一向に弥陀如来をたのみたてまつりて、自余の一切の諸神諸仏等にもこころをかけず、一心にもっぱら弥陀に帰命せば、如来は光明をもって・その身を摂取して捨てたまうべからず、これ、すなわちわれらが一念の信心決定したるすがたなり、かくのごとくこころえてののちは、弥陀如来の他力の信心をわれらにあたえたまえる御恩を・報じたてまつる念仏なりとこころうべし、これをもって信心決定した る・念仏の行者とは申すべきものなり、

あなかしこ　あなかしこ

（不読）

文明第五、九月下旬のころこれを
書く云々

此方十劫邪義章の大意

近ごろこの地方の念仏者の中に、根拠のないあやしげな文句で、これこそが信心を得たすがただなどといい、しかも自分は浄土真宗の信心をよく心得ていると思っているものがいます。そのものは、「十劫の昔に阿弥陀如来となられたときに、如来が私たちの往生をも定めてくださったご恩を、忘れないのが信心である」とい

うのです。

これは大きなあやまりです。阿弥陀如来がさとりを開いて仏となられたことを知ったとしても、私たちが往生することのできる他力の信心のいわれを知らなければなんにもなりません。これより後は、まず浄土真宗の信心のいわれをしっかりと心得るべきです。その信心とは『大経』には、「至心・信楽・欲生」と説かれ、『観経』には、「至誠心・深心・回向発願心」と説かれ、『小経』には、「一心」と説かれていますが、すべて他力の信心をあらわしたものです。その信心とは、自力のはからいを捨て、ひたすら阿弥陀如来を信じ、その他の神や仏に心をかけず、二心なく阿弥陀如来に帰命すれば、み仏は光明の中におさめとってお捨てにならないのです。これが信心の決定したすがたです。このように心得た後

の念仏は、み仏が信心を与えてくださったご恩に報いる念仏であると思うべきです。このような人を信心が決定した念仏者というのです。